

国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 二格名詞句の意味解釈を支える構造的原理

著者	和氣 愛仁
雑誌名	日本語科学
巻	7
ページ	70-94
発行年	2000-04-15
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002030">http://doi.org/10.15084/00002030</a>

# 二格名詞句の意味解釈を支える構造的原理

和 氣 愛 仁

(筑波大学大学院)

## キーワード

二格名詞句, 意味役割, 構文タイプ, 構造格, 意味格

## 要 旨

二格名詞句の意味役割はなぜかくも多様であるのか, また, それらの意味役割がある場合に連続的であったり, 解釈のゆれを生じたりするのはなぜなのかということについて, 体系的に述べた研究はほとんどないといってよい。本稿では, さまざまな構文の中で二格名詞句の意味役割が決定されるさまを見ることを通じて, [相手] [場所] [着点] などの意味役割は, ガ格またはヲ格名詞句と二格名詞句のふたつの名詞の意味素性の相対的關係や, 動詞のアスペクト, 語用論的な条件などによって, 結果的に解釈される性格のものであるということを明らかにする。また, その考察の結果から, 二格名詞句は, 他の構造格成分との間に一定の意味的關係を保ちながら副次的な構造を作り, そのことで構文タイプを拡張的に規定するという機能を果たしているということを述べる。

## 1. はじめに

### 1.1. 問題となること, および本稿の目的

二格名詞句が担う典型的な意味役割<sup>1</sup>としては, これまで, [相手], [場所], [着点], [起因], 〈目的〉<sup>2</sup>など, 様々のものがあげられてきた。

- (1) 太郎が花子に秘密を話した。 ([相手])
- (2) 机の上に本がある。 ([場所])
- (3) 本を本棚にしまう。 ([着点])
- (4) 太郎が花子の変わりように驚いた。 ([起因])
- (5) 花子がスーパーに買い物に行った。 (〈目的〉)

しかし, なにゆえにこれほど多くの意味役割を二格名詞句が担いうるのかといった視点からの言及は非常に乏しいと言わざるを得ない。多くの意味役割をただ羅列的に記述するだけでは, 格助詞「に」が負う機能負担量の大きさという点で, 重大な疑問を引き起こすことになる。

一方, プロトタイプ論的な立場から, 意味役割と意味役割との連続性や, 意味役割のゆれといった問題が議論されることもある。たとえば, 益岡(1987)では, 次の(6)の二格名詞句の意味役割を, 暫定的処理と前置きした上で[相手]の一種としており, また, (7)の二格名詞句の意味役割を, [場所]と[着点]の中間的な意味役割としている。

- (6) 太郎が会議に遅れた。
- (7) 花瓶にひびが入った。

しかし、多くの二格名詞句の意味役割が互いにどのように関連しあっているのかという問題についての体系的な考察や、そもそもなぜ意味役割の解釈にゆれが生じるのかといった問題についての考察は、益岡(1987)以降も必ずしも十分ではない。

本稿では、[相手][場所][着点]といった二格名詞句の個別的な意味役割は、ガ格またはヲ格名詞句と二格名詞句のふたつの名詞の意味素性の相対的關係や、動詞のアスペクト、語用論的な条件などによって、結果的に解釈される性格のものであるということを明らかにする。また、その考察の結果から、二格名詞句は構文の意味的な側面と構造的な側面のいずれにも関与する成分であり、他の構造格成分に対して一定の意味的な関係を保ちながら副次的構造を作り、構文タイプを拡張的に規定するという機能を果たしていることを述べる。以下、1.の残りの部分で考察の範囲を明確にしたのち、2.で二格の項に対して要求される意味的特性、中でも特に問題になる「場所性」という概念について詳しく述べる。その後3.で、二格名詞句が関与する構文タイプごとに、個別の二格名詞句の意味役割の解釈がどのように決定されるかについてみていく。

## 1.2. 考察の範囲

和氣(1996)では、一事象を命題として持つ動詞句中には、[相手][存在点]<sup>3</sup>[着点]などの意味役割を持つ二格名詞句は、たとえ意味役割が異なっても、ふたつ以上共起することがない、という事実を指摘した(二重二格制限)。このことは、これらの二格名詞句が完全な意味格成分としては機能していないことを示している。つまり、それぞれの二格名詞句は、より構造的なレベルの機能を果たす成分として同一のレベルで機能しているために、一動詞句中に共起することが許されないのだと考えることができるのである。このことから、格助詞「に」そのものは、[相手]や[着点]のような意味役割の表示という機能に関しては本来中立的であるということになる。

本稿では、直接および間接受動文の動作主二格、使役文の被使役者二格は考察対象から外す。受動文の動作主二格、使役文の被使役者二格は、[相手]や[着点]などの意味役割を持つ二格名詞句と共起することができる。このことから、これらの文法的ヴォイスに関与する二格名詞句は、[相手]や[着点]などの意味役割を持つ二格名詞句とは異なった構文的機能を持つと考えられる。実際、ヴォイスに関与する二格と[相手][着点]などの二格は語順を入れ替えることができない。

(8) 太郎は花子にパーティーに招待された。 (二重下線部は動作主)

(9) 太郎は花子に弟に英語を教えさせた。 (二重下線部は被使役者)

(10) \*太郎は弟に花子に英語を教えさせた。 (二重下線部は被使役者)

また、以下のような、所有を表す文や主体の能力を表す文の中には、見かけ上一動詞文中にふたつの二格名詞句が共起しているように見えるものがある。

(11) 太郎には背中に大きな傷がある。

(12) 太郎には水に顔がつけられない<sup>4</sup>。

(13) \*背中に太郎に大きな傷がある。

これらは、ある主体についてその属性を述べる属性叙述文である。属性主体の二格と、より動詞に近い側の二格とが共起可能なことから、これらふたつの二格は構文上異なる機能を果たすと考

えられる。この場合もまた、ふたつの二格名詞句の語順の入れ替えが不可能である。したがって、属性主体の二格も本稿の考察の対象から外すことにする。

また、〈目的〉は、いくつかの先行研究では〔相手〕〔着点〕などと同列に名詞句の意味役割として扱われることがあった。しかし、〈目的〉の二句は、通常二格名詞句と共に起ることから、副詞句としての側面が強いと考えられる。また、(15)に見るように、〈目的〉の二句自身が項を取りうることから何らかの述語性を持っているということも考えられる。以上のことから、〈目的〉の二句についても考察の対象から外すことにする。

(14) 太郎が病院に見舞いに行った。 (二重下線部は〈目的〉二句)

(15) 太郎が病院に次郎を見舞いに行った。 (波線部は〈目的〉二句がとる項)

さらに、時の二句、および結果状態の二句も、考察の対象から外すことにする。これらの成分も副詞句として機能しており、したがって一般の二格名詞句と共に起ることができる。

(16) 3時に太郎が花子に会った。 (二重下線部は時の二句)

(17) 花子がボールに卵白を8分立てに泡立てた。 (二重下線部は結果状態の二句)

以上のことから、本稿で考察の対象となるのは、形態として「に」を持つ成分のうち、埋め込み文を持たない単文中で、必須的に事象に参加する実体を指す名詞句ということになる。以下本稿において「二格名詞句」といった場合は、この範囲の二格名詞句を指すものとする。

## 2. 名詞の意味素性

### 2.1. 意味素性の階層性

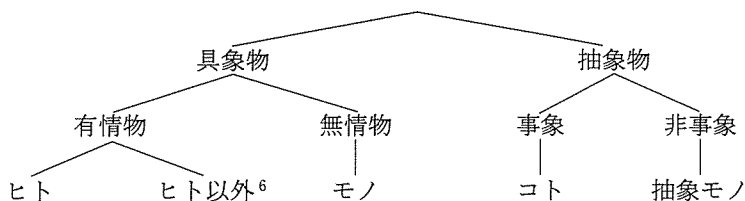
次に示すとおり、動詞「かぶせる」は、二格の項にモノ名詞もヒト名詞もとることができる。このとき、(18)の二格名詞句の意味役割は〔着点〕、(19)の二格名詞句の意味役割は〔相手〕にそれぞれ近づき、解釈がゆれる。

(18) 太郎がふとんを机にかぶせた。

(19) 太郎が花子にふとんをかぶせた。

「かぶせる」が要求する二格の項には、具象物であればどのようなものでも立つことができる。つまり目に見える形のあるものならば、そこに何かを「かぶせる」ことが可能である。一方名詞の側では、「机」はモノ、「花子」はヒトという具合に、より詳細なレベルの意味素性を持っている。この、動詞側の要求する意味的特性の範疇的なレベルと名詞側の持っている意味素性の範疇的なレベルとのずれが、ある場合に意味役割の解釈のゆれを引き起こすことになるのである<sup>5</sup>。このようなことをより厳密に記述するには、意味素性の階層性を考えておく必要があるだろう。たとえば、ヒトは有情物に含まれ、有情物は具象物に含まれる、というような階層的な構造である。以下にその素案を示す。

## (20) 意味素性の階層性



ただし、この階層図は、存在論 (ontology) 的な範疇をそのまま図式化したものではなく、ひとつの名詞に内在する意味素性と、動詞が項に対して要求する意味的特性との両方を組み合わせて考えたときに、文法の記述にとって有効になるとと思われる意味的範疇を（本稿に直接関係する部分のみ）帰納的に階層化したものである。したがって、すべての名詞にわたってその意味素性のラベルづけを試みたものではないことに注意されたい。また、後述するとおり、「場所」という意味は名詞単独では持ち得ないため、(20) の階層図には含まれていない。以下では、この「場所」の意味について考えてみたい。

### 2.2. 「場所性」について

#### 2.2.1. 「場所性」は名詞の内在の意味素性ではない

「場所名詞」という名付けがしばしばなされてきたことからもうかがうことができるように、多くの先行研究では、名詞そのものに場所性という意味素性を埋め込んでおくような記述を行っている。ここではこのような記述の妥当性について検証してみたい。

すでに見たとおり、(18) (19) では、二格の項にモノもヒトも立つことができる。この場合、「かぶせる」が対象ヲ格「ふとん」の位置変化をも表すと考えれば、ヒト名詞モノ名詞ともに、より上位の意味素性範疇として「場所」という素性を持つというような記述も一見可能であるかのようと思われる。しかし、以下のような、典型的な位置変化を表す動詞の場合には、二格の項にヒト名詞は立つことができない。

(21) 太郎が学校に行った。

(22) \*太郎が花子に行った。

(23) 太郎が机に荷物を運んだ。

(24) \*太郎が花子に荷物を運んだ。

上の各例の許容度の差は、ヒトとモノが、それ自体に内在する性質としての「場所」の意味を同じようには持ち得ない、ということを示している。では、モノ名詞ならば名詞自体の特性として場所性を内在させることができる、という記述はどうだろうか。

(25) 太郎が病院に行った。

という文においては、「行く」という動作事象の中に「太郎」という主体と「病院」というモノが置かれることによって初めて「病院」が場所としての意味を持つことになる。その一方、

(26) A建設会社が病院を改築した。

の「病院」には場所としての意味はない。したがって、ここでも、名詞そのものに場所性という意味素性が内在しているというような記述の仕方は適當ではないと言える。

これまで「学校」や「病院」が「場所名詞」として扱われてきたのは、それらの内部に存在することを許される実体が、主にヒトであるという暗黙の前提があるためである。しかし、後述するように、場所性には、2つの名詞の相互関係によって決まるという側面がある。たとえば、

(27) 学校に太郎がいる。

(28) テーブルにゴキブリがいる。

(29) 戸棚におやつがある。

のような例で、もし2つの名詞の相互関係を考えず「学校」を「場所名詞」と名付けるなら、「テーブル」「戸棚」を「場所名詞」と言わなくてよいのか、という問題が起きてしまうことになる。

以上に見てきたことから、場所という意味は、常に相対的に決定されるということができる。すなわち、ヒトとモノ、あるいはモノとモノなどがある事象の中に置かれることによって場所という意味が現れてくるのであり、ある実体が、それ自体単独で最初から場所としての意味を持つことはない、と考えられるのである。

## 2.2.2. 「場所性」をつくるもの

それでは、具体的に場所性とはどのように規定できるのであろうか。

本稿では、二格名詞句の場所性を構成する基本的な要素として、「地点性」という性質と「所在性」という性質を提案したいと思う。「地点性」とは、「認知空間内の一点を、特定の地点として指定できる」という性質であり、「所在性」とは、「特定の地点の内部に、ある実体が存在することができる」という性質である。

もう少し説明しよう。たとえば典型的な位置変化構文の場合、空間の広がりの中で、移動の到達点となるべきモノの位置が特定できなければならず（「地点性」の要求）、さらに、移動の完了時に、「地点性」によって特定された地点内に移動主体が存在できる必要がある（「所在性」の要求）。したがって、典型的な位置変化構文では、上に述べた「地点性」と「所在性」の確立が必須であると言える。また、存在（あるいは発生）構文の場合も、空間の中で、実体の存在地点（発生物の発生地点）となるべきモノの位置が特定できなければならず、また、その特定された地点には存在主体（発生物）が存在できなければならない。存在、発生の場合も「地点性」「所在性」のいずれも満たす必要があると言える。

これまで「場所性」と呼ばれてきた概念の中には、これらふたつの性質が混在しているようである。たとえば、田窪（1984）で「場所名詞」の特性として挙げられている、「疑問詞『どこ』で聞ける」という性質は、「地点性」に関係する性質であるし、「移動を表わす動詞の Goal, Source に現われる」「場所の状況語句を作る『NPで』のNPの位置に現われる」<sup>7</sup>「存在を表わす文において『位置』を示す『NPに』のNPの位置に現われる」といった性質は、「所在性」に関連する性質であると言える。以下、「地点性」「所在性」について、具体的な例を通して見てみよう。説明の都合上、「所在性」から見ていくことにする。

2.2.2.1. 「所在性」

典型的な位置変化構文において、二格名詞句に最終的に求められるのは、「所在性」の確立である。移動主体がヒトの場合、これを満たせるのは、モノ名詞の一部とコト名詞である。

- (30) 太郎が学校に行った。
- (31) 太郎が対岸に渡った。
- (32) \*太郎が本に行った。
- (33) 太郎が会議に行った。
- (34) \*太郎が花子に行った。

モノ名詞の場合は、その内部に、移動主体を存在させられるだけの空間があるかどうか許容度を分ける鍵となる。(33) のコト名詞二格の場合は、コトの内部にできごとを構成するメンバーとしてヒトが存在可能なので許容される。

(34) のように、ヒト名詞を着点にした位置変化構文は非文となる。これは、ヒトである「花子」が空間としてその中に「太郎」全体を物理的に内包させることができないためである。ところが、以下のように移動主体を抽象モノ名詞にすると、二格の項にヒト名詞が立てるようになる。

- (35) 連絡が花子に行った。
- (36) 所有権が花子に渡った。

抽象モノがヒトに向かって移動する場合は、ヒトが「所有」というかたちで抽象モノを結果的に内部に存在させることができるため、許容される文になる。また、具象物としてのモノがヒトに向かって移動する場合でも、事象の完了時にモノがヒトに所有されるという読みが可能な場合には、二格の項にヒト名詞が立てる。

- (37) 手紙が花子に行った。
- (38) (トランプで) ババが花子に行った。

以上に見てきたことからわかるように、「所在性」は、名詞単独では決まらず、名詞と名詞との相対的な関係によって満たされるということが言える。ここで、「所在性」を満たしうる名詞の素性の組み合わせを整理しておく。

(39) 「所在性」を満たす名詞の意味素性の組み合わせ

ガ ニ	ヒト	モノ	コト	抽象モノ
ヒト	△ <sup>8</sup> 太郎に息子がいる	△ <sup>9</sup> 太郎に金がある	× *太郎に会議がある	○ 太郎に発言権がある
モノ	一部○ 学校に太郎がいる *本に太郎がいる	一部○ 学校に机がある *本に机がある	× *学校に会議がある	○ 本に問題がある
コト	○ 会議に傍聴者がいる	○ 会議に参考資料がある	× *会議に投票がある	○ 会議に議題がある
抽象 モノ	× *議題に太郎がいる	× *議題に机がある	× <sup>10</sup> *議題に投票がある	○ 議題に問題がある

ある名詞がある名詞に対して「所在性」を満たすかどうかは、基本的には、次のような言い換えができるかどうかでテストできる。

- (40) a. 太郎が学校に行った。 → 学校に太郎がいる。  
b. 車が駅に着いた。 → 駅に車がある。  
c. 水たまりにボウフラが発生した。 → 水たまりにボウフラがいる。  
d. コップにひびが入った。 → コップにひびがある。

ただし、「所有」の問題が関係する場合や、後で述べる「姿勢の変更」の場合には、所在の「様態」という要素が加わってくるために、単純に「いる／ある」で言い換えられるものだけが「所在性」を満たす、ということにはならない。このことについては、後でまた触れる。

#### 2.2.2.2. 「地点性」

さて、ここまでは「所在性」の問題について見てきたが、ここまでの説明では、「場所性」のすべてを説明したことにはならない。「所在性」よりも基層的な性質のために見えにくい、場所の意味を構成するにあたっては、先に挙げた「地点性」の確立が前提になっている。以下この「地点性」の問題について見てみる。

名詞として表現されうる存在は、具象物／抽象物の別に関わらず実体性を持って認知空間内の一点を占めるため、どんな名詞も、潜在的には、それ自体が「地点性」によって特定の地点となる可能性を持っている。したがって、場所の意味を構成する上で問題になるのは、その実体が果たして「所在性」を満たす地点となりうるかどうかということ、すなわち、「地点性」によって特定されたその地点と「所在性」を満たすべき地点とが一致するかどうか、ということである。

- (41) \*太郎がテーブルに行った。

この例は、通常は認められない文である。この場合、「地点性」によって特定される地点は、モノとしてのテーブルそのものである。モノとしてのテーブルは、ヒトに対しては「所在性」を満たし得ない。すなわち、「地点性」によって特定された地点が、「所在性」を満たし得ないために、結果として上の文は非文となる。ところが、

- (42) 太郎が3番テーブルに行った。

- (43) 太郎が右側のテーブルに行った。

とすることで、許容度が上がることが観察される。(42)では、二格名詞句の示す実体が1番でも2番でもない「3番テーブル」であるために、それ以外のモノから相対化されて空間内の位置が区切られる。そのため、「地点性」によって特定される地点は、モノとしてのテーブルそのものではなく、「3番テーブル」が空間内に占める位置のほうになる。空間内の位置であればその内部にヒトが存在できるので、結果として「所在性」が満たされ、文の許容度が上がることになる。同様な例として、たとえば、ひとりの男性が居並ぶ女性の中のひとりの前に行き、交際を申し込むような状況を想定した場合、第三者の発話として、

- (44) 太郎が花子に行った！

といった文も許容されやすくなる。これも、複数の女性の中で「花子」が相対的に特立されるた



めに、「地点性」によって特定される地点が、「花子」そのものでなく「花子」が空間内に占める位置のほうになり、結果的に「所在性」も満たされ、場所表現として認可されるということである。さらに、たとえば学校でスポーツテストが行われている状況を想定した場合、

- (45) まず100mコースに行ってください。その次は400mトラックに行ってください。そして最後は鉄棒に行ってください。

という例も許容される。この場合は、校庭という区切られた空間の中で「100mコース」「400mトラック」「鉄棒」がそれぞれ相対的に扱われているために、「地点性」によって特定されるのが「100mコース」「400mトラック」「鉄棒」それぞれが空間内に占める位置ということになり、結果的に「所在性」が満たされて、場所表現として許容されることになる。以上の(42)(43)(44)(45)は、語用論的な手段によって、実体(ヒト/モノ)そのものを、それが存在する空間内の位置に読み替えるということを行っている例だと言ってよいだろう。

このような場合には、二格の名詞のヒト/モノの意味素性の別は問題にされない。なぜなら、これらの例で場所として扱われるのは「テーブル」「花子」「鉄棒」という実体そのものではなく、「テーブル」「花子」「鉄棒」によってマークされる空間内の位置のほうだからである。(44)で言えば、「太郎」は「花子」の中ではなく、「花子」が空間に占める位置、まさに「花子」の存在するその場所に存在することになる<sup>11</sup>。そして、このような相対化の手続きによって空間から切り取られ特定された「地点」は、もともと空間の一部であるため、どんな具象物でもその中に存在することができることになる。このような手続きで「地点性」が確立された場合に、常に「所在性」も満たされて文の許容度が上がるのは、このような理由による<sup>12</sup>。

### 2.2.3. 「場所性」についてのまとめ

以上、ここでは、論を進めるにあたって問題となる場所性という概念について述べた。繰り返し述べてきたとおり、場所性とは単独の名詞に内在する意味素性ではなく、「地点性」及び「所在性」という性質によって、いわば語用論的に構成されるものであると言える。このような考え方をとることによって、場所名詞という範疇をもうける必要がなくなり、かつ、ヒト名詞、モノ名詞、コト名詞、抽象モノ名詞のすべてに渡って場所性についての統一的な説明が可能になる。以降本稿で「二格名詞句が場所性を満たす」と言うときは、「地点性」によって地点として特定された二格名詞句が指す実体（またはその実体が空間に占める位置）が、ガ格またはヲ格名詞句が指す実体に対して「所在性」を満たす、ということを目指すものとする<sup>13</sup>。

## 3. 二格名詞句の意味役割の解釈

以下では、動詞が項に対して要求する意味的特性と、名詞の意味素性との関係を整理し、個別具体的な二格名詞句の意味役割がいかにして解釈されるかについて見ていく。先行研究に挙げられてきた意味役割の名前については、なるべくその位置づけを明確にした上で用いるようにするが、個別に解釈される意味役割のバリエーションのすべてにわたって無理に名付けをすることはしない。もっとも肝心なことは、動詞が項の意味的特性としてどのようなものを要求し、名詞が

どのようにしてその要求を満たすかということである。その要求と補充の関係を整理することによって、いくつかの構文タイプが浮かび上がってくる。

### 3.1. 相手構文

以下の例では、ヒト名詞のみが二格の項に立つことができる。

(46) {ヒト}ガ {ヒト}ニ

a. 太郎が花子に会った。

(47) {ヒト}ガ {ヒト}ニ {モノ／抽象モノ}ヲ

a. 太郎が花子に事情を話した。

b. 太郎が花子にプレゼントをあげた。

c. 太郎が花子にドイツ語を教えた。

d. 太郎が花子に手紙を渡した。

e. 太郎が花子に道をたずねた。

これらの文は、複数のヒトが参加する、ヒトのみが可能な知的活動を表している。このとき動詞は、二格の項として、ガ格名詞句が示す実体（ヒト）と同等の、意図的・主体的動作の可能な性質（この性質を以降「相手性」と呼ぶ）を持った受け手を要求する。ヒトに対する相手性を満たせるのは、ほとんどの場合ヒトのみであるので、結果的には、動詞は二格の項にヒトを要求していると考えてよい。本稿では、この場合の二格名詞句の意味役割を、典型的な「相手」と認定する。

相手構文では、二格名詞句が示す実体の側から見た事象の記述が可能である。

(48) a. 花子が太郎に会った。

(49) a. 花子が太郎から事情を聞いた。

b. 花子が太郎からプレゼントをもらった。

c. 花子が太郎からドイツ語を教わった。

d. 花子が太郎から手紙を受け取った。

e. 花子が太郎に道をたずねられた。

これは、相手構文の二格に立つ受け手が意図的・主体的な動作の可能なヒトであるが故に、逆に受け手側を主体として事象を叙述できる可能性があり、多くの場合はそのための手段が語彙的に用意されている、ということである。また、(47) e.のように語彙的にそのような動詞が用意されていない場合でも、(49) e.のように、受動文化によって、項の数を増やさずに、対応する事象の叙述が可能である。

(50) 相手構文

a. 二項

動詞が要求する意味的特性：{ヒト}ガ {ヒト}ニ

名詞が補充する意味素性： {ヒト}ガ {ヒト}ニ

二格名詞句の意味役割： [相手]

b. 三項

動詞が要求する意味的特性：{ヒト}ガ {ヒト}ニ {モノ／抽象モノ}ヲ  
名詞が補充する意味素性： {ヒト}ガ {ヒト}ニ {モノ／抽象モノ}ヲ  
二格名詞句の意味役割： [相手]

### 3.2. 典型的な位置変化構文，所有変更構文

以下の例が表す事象は，ある実体が動いて，現在の存在地点を失う，または新たな存在地点を獲得する，という動きである。以下本稿では，この事象を，典型的な位置変化と見なして，「地点の変更」という用語で呼ぶことにする。

(51) {ヒト}ガ {モノ}ニ

- a. 太郎が学校に行った。
- b. 太郎が対岸に渡った。
- c. 太郎が空港に向かった。

(52) {ヒト}ガ {コト}ニ

- a. 太郎が授業参観に行った。
- b. 太郎がコンサートに向かった。

(53) {モノ}ガ {モノ}ニ

- a. 車が駅に着いた。
- b. リンゴが地面に落ちた。

これらの動詞は二格の項の意味的特性として場所性を要求し，ガ格名詞句とニ格名詞句の組み合わせによって構成された場所性がその要求を補充する。本稿は，「地点の変更」における二格名詞句の意味役割を，典型的な「着点」として認定する。「地点の変更」の場合，構文タイプの意味そのものによって，起点カラ格の生起が可能である。

- (54) a. 太郎が家から学校に行った。  
b. 太郎が桟橋から対岸に渡った。  
c. リンゴが枝から地面に落ちた。

次に三項動詞の場合を見てみる。

(55) {ヒト}ガ {ヒト}ヲ {モノ}ニ

- a. 太郎が次郎を部屋に入れた。

(56) {ヒト}ガ {ヒト}ヲ {コト}ニ

- a. 教授が太郎を学会に送った。

(57) {ヒト}ガ {モノ}ヲ {モノ}ニ

- a. 太郎が本を机に動かした。
- b. 太郎が段ボールを物置に運んだ。
- c. 太郎が水をコップに移した。

上の例が表す事象は，主体がある対象（具象物）を動かして，新たな位置を獲得させるという「地点の変更」の動きであり，二項動詞の場合と同様起点カラ格の生起が可能である。この場合，ニ格名詞句は，ヲ格名詞句（具象物）に対して場所性を満たす必要がある。

(58) 典型的な位置変化構文（「地点の変更」をあらわす構文）

a. 二項

動詞が要求する意味的特性：{具象物}ガ {場所}ニ

名詞が補充する意味素性：{ヒト/モノ}ガ

{ガ格名詞句に対して場所性を満たしうる意味素性}ニ

ニ格名詞句の意味役割：[着点]

b. 三項

動詞が要求する意味的特性：{ヒト}ガ {具象物}ヲ {場所}ニ

名詞が補充する意味素性：{ヒト}ガ

{ヒト/モノ}ヲ

{ヲ格名詞句に対して場所性を満たしうる意味素性}ニ

ニ格名詞句の意味役割：[着点]

ところで、(35) (36) (37) (38) で見たように、位置変化構文であっても、事象の完了時にモノや抽象モノがヒトに所有されるという意味が読める場合は、ニ格の項にヒト名詞が立つことができる。同様に、以下の「届く」「届ける」「送る」もニ格の項としてヒト、モノ名詞のいずれをも取りうるが、ヒト名詞の場合には、事象の完了時にモノや抽象モノがヒトに所有されるという意味を表す。本稿では、このような文が表す事象を「所有の変更」と呼び、これを「地点の変更」の下位類型として認定する。また、「所有の変更」を表す構文を所有変更構文と呼ぶことにする。

(59) {ヒト}ニ {モノ}ガ

a. 花子に荷物が届いた。

(60) {ヒト}ガ {ヒト}ニ {モノ}ヲ

a. 太郎が花子に荷物を届けた。

b. 太郎が花子に荷物を送った。

「届ける」「送る」は、ニ格名詞句がヒト性を持つ場合、受け手の主体的動作が期待できるので、相手構文に準ずるものとして構文タイプのあてはめが起こり、ニ格名詞句の意味役割の解釈が[相手]に近づく。このような場合、典型的な相手構文と同様、多くは以下のようにもとの文の受け手を主語にした構文が可能である。

(61) 花子が太郎から荷物を受け取った。

ただし、「所有の変更」はあくまでも「地点の変更」の下位類型であるので、「所有の変更」におけるニ格名詞句の意味役割についても[着点]の下位類型として扱い、特に名付けることをしない。

所有変更構文の場合、2.2.2.1.の最後で挙げたテストは完全な容認度を示さないことがある。

(62) a. 連絡が花子に行った。 → ??花子に連絡がある。(未来時ならば可)

b. 所有権が花子に渡った。 → 花子に所有権がある。

c. 手紙が花子に行った。 → ??花子に手紙がある。

d. 太郎が花子に荷物を届けた。 → ??花子に荷物がある。

抽象モノ名詞二格の場合、「所有権」のような継続的にヒトが所有できるものであればこのテストは有効であるが、「連絡」のように地点が変更されたとたんに消滅してしまうようなものの場合、「ある」で現時点での所在を言うことはできない。また、具象物としてのモノ名詞二格の場合、「所持」あるいは「保持」といった一種の様態の指定が加わるために、単純な所在の意味として「ある」で表現することは難しくなる。

### 3.3. 非典型的な位置変化構文—状態変化構文への接近

ここでは、典型的な位置変化には分類できないいくつかの構文について見ていく。

#### 3.3.1. 姿勢変化構文

以下の例は、ガ格またはヲ格の名詞が指す実体の姿勢の変化を表している。このとき二格名詞句は、姿勢を変えた実体が事象の完了時に位置づけられる地点を示している。

- (63) a. 太郎が 地面に／?本に 立った。  
b. 太郎が 地面に／?ふろしきに 寝そべった。  
c. 太郎が 地面に／?ふろしきに 倒れた。  
d. 太郎が 床に／?本に しゃがんだ。  
e. 太郎が 床に／?本に 伏せた。  
f. 太郎が 本を 机に／?鉛筆に 伏せた。  
g. 棒が 地面に／?本に 立った。  
h. 太郎が 棒を 地面に／?本に 立てた。  
i. 棒が 地面に／?ふろしきに 倒れた。  
j. 太郎が 棒を 地面に／?ふろしきに 倒した。

ただしこれらの動きは「地点の変更」ではないため、起点カラ格が生起できない<sup>14</sup>。本稿では、これらの文が表す事象を「姿勢の変更」と呼び、これらの構文を姿勢変化構文と呼ぶことにする。

姿勢変化構文では、2.2.2.1.の最後で挙げたテストは、完全な容認度を示さない場合が多い<sup>15</sup>。

- (64) 太郎が地面に倒れた。→ ??地面に太郎がいる。

これは、「姿勢の変更」を表す動詞が、様態の指定をやや含んでいて、単純な実体の「所在」の意味だけを表しているわけではないからである。しかし、(63)を見てわかるとおり、二格の項に立つ名詞の選択には、ガ格／ヲ格名詞句が指す実体と、二格具象物との相対的な大小関係が問題になっている。このことは、まさに二格の名詞の選択において「所在性」が問題になっているということの証拠である。したがって、「姿勢の変更」においても、二格名詞句の場所性を満たすことが要求されていると考えることができる。ただし、この場合の二格名詞句の意味役割は、起点との関わりを持たないという点で、典型的な「着点」とは異なる。ここではこれを、仮に「密着点」と名付けておくことにする。

- (65) 姿勢変化構文（「姿勢の変更」をあらわす構文）

- a. 二項

動詞が要求する意味的特性：{具象物}ガ {場所}ニ

名詞が補充する意味素性： {ヒト／モノ}ガ

{ガ格名詞句に対して場所性を満たしうる意味素性}ニ

ニ格名詞句の意味役割： [密着点]

b. 三項

動詞が要求する意味的特性：{ヒト}ガ {モノ}ヲ<sup>16</sup> {場所}ニ

名詞が補充する意味素性： {ヒト／モノ}ガ

{モノ}ヲ

{ヲ格名詞句に対して場所性を満たしうる意味素性}ニ

ニ格名詞句の意味役割： [密着点]

### 3.3.2. 密着構文

以下の例は、ある実体が具象物に接触・密着するときの様態を表している。

- (66) a. 太郎が ?花子に／鉛筆に ひもを 巻いた。
- b. 太郎が ?花子に／壁に ペンキを 塗った。
- c. タオルが ?花子に／ハンガーに 引っ掛かった。
- d. 太郎が ?花子に／ハンガーに タオルを 引っ掛けた。
- e. 太郎が ?花子に／吊革に ぶら下がった。
- f. 泥が ?太郎に／服に ついた。
- g. 太郎が ?花子に／壁に リボンを つけた。
- h. ガラスが ?太郎に／壁に 刺さった。
- i. 太郎が ?花子に／壁に ナイフを 刺した。
- j. 太郎が 花子に／手すりに つかまった。
- k. 太郎が 花子に／手すりに 触れた。

これらの動詞は「姿勢の変更」以上に様態の指定が強く、もはや所在の意味をほとんど表さない。「所在性」がニ格の場所に必須の性質であることを考えれば、これらのニ格の項に対して要求される意味的な特性は、場所性ではなく具象物性であると言えるだろう。ただしその場合、話者によっては、ニ格名詞句がヒト性を持つ場合の許容度に問題を感じる場合があることについて触れておかなくてはならない。(66)の各例においては、ニ格名詞句がヒトの場合の許容度は一様ではないが、いずれの場合でも「背中」や「首」「腕」などの接触部分を特定したほうがより許容度が高くなる。これらはさらに、接触の局所性が問題にならない以下のような例に連続している。

- (67) a. 太郎が 花子に／壁に もたれかかった。
- b. 太郎が 花子に／壁に 飛びついた／かみついた。
- c. ボールが 花子に／壁に ぶつかった／当たった。
- d. 太郎が 花子に／壁に ボールを ぶつけた／当てた。
- e. 泥水が 花子に／壁に かかった。

f. 太郎が 花子に／壁に 泥水を かけた。

g. ふとんが 花子に／机に かぶさった。

h. 太郎が 花子に／机に ふとんを かぶせた。

(67) の各例は、ガ格またはヲ格名詞句が指す実体の様態の変化と、ニ格名詞句が指す実体が接触によって受ける影響とを同時に表している。(67) でヒト名詞ニ格が問題ないのは、接触の影響が全体波及的なものか、心理的なものだからである。このような接触であれば、ヒトへの影響性がより読みやすくなるために、文全体の許容度も増すことになる。(67) に比べて (66) のほうは接触の局所性が問題になりがちなので、ヒトへの影響性が不十分なものになり、ヒト名詞ニ格の許容度がやや落ちる、ということである。以上の (66) (67) はヒトへの影響性という点で連続的な関係にあり、ヒト名詞ニ格の許容度が一様ではない。しかし、「ある実体の接触が、受け手となる具象物に対して何らかの影響をおよぼし、接触する実体と接触を受ける具象物が一体的に様態の変化をする」という事象を表わす点で統一的に扱うことができる。本稿では、(66) (67) の文が表す事象をまとめて「密着の様態」と呼び、「密着の様態」を表す構文を密着構文と呼ぶことにする。また、密着構文におけるニ格名詞句の意味役割を、[密着物]と仮称しておく。

以上に見たとおり、密着構文におけるニ格の項には、基本的には具象物性が要求されることができると考えることができる。しかし、(67) のような、ヒト名詞・モノ名詞の選択に問題がない場合には、以下に述べるふたつの要因から、意味役割の解釈にゆれが生じる。まずひとつは、名詞に内在するより具体的なレベルの意味素性による意味役割の解釈のゆれである。つまり、名詞句がヒト性を持っていれば[相手]に解釈が傾きやすくなり、モノ性を持っていれば[着点]に解釈が傾きやすくなるということである。これは二項および三項動詞に共通する問題である。

そしてもうひとつの要因は、語順の問題である。これは三項動詞の場合に問題になる。例えばニ格名詞句がヒト性を持つ場合は、以下のように語順が[ガ・ニ・ヲ]に制限される傾向がある。

(68) a. 太郎が花子にふとんをかぶせた。

b. ?太郎がふとんを花子にかぶせた。

統語的には、ニ格名詞句は、それとの間に何らかの意味的關係性(相手性、場所性など)を持つ項の隣接位置に生起するという原則があると考えられる。一方名詞の意味素性の問題としては、主語がヒト名詞の場合、モノに対する関係性よりもヒトに対する関係性のほうが優先的に読み込みやすいので、語順が傾向として[ガ・ニ・ヲ]に制限されやすくなる。つまり、意味素性の潜在的な傾向性としては、ヒトは、対象モノが密着するもう一方の具象物としての役割よりも、動作主の働きかけの受け手としての役割のほうが果たしやすいということである。このようなガ格とニ格の名詞の意味素性(ここではヒト性)の組み合わせから、相手構文との共通性が認識されて、相手構文に準ずるものとして構文タイプの当てはめが起こり、語順に一定の傾向が現れると考えられる。ただし、密着構文の基本的な型としては、ニ格の項に求められる意味的特性はあくまでも具象物性であるという点には注意すべきである。

一方、密着構文においてニ格の項がモノ名詞の場合、語順は[ガ・ヲ・ニ][ガ・ニ・ヲ]のいずれもが可能である。しかし、[ガ・ヲ・ニ]は対象ヲ格の位置変化、[ガ・ニ・ヲ]はモノニ格

の状態化の読みが相対的に強くなる。

(69) a. 太郎がふとんを机にかぶせた。

b. 太郎が机にふとんをかぶせた。

語順が[ガ・ヲ・ニ]の場合、動作主の「ふとん」への働きかけが強く読み込まれるために、二格の「机」は「ふとん」が結果的に位置づけられる位置を表しやすくなる。一方[ガ・ニ・ヲ]の場合、動作主の働きかけが二格「机」に及ぶように読まれやすいため、「机」が「ふとんをかぶせる」という状態の変化を受けるという読みが強くなる。

以上のように、密着構文においては、名詞の意味素性と語順というふたつの要因の組み合わせによって、結果的な意味役割の解釈にゆれが生じる。もっとも明確にゆれが生じる組み合わせは以下のふたつであろう。ひとつ目は、二格名詞句がヒト性を持ち、語順が[ガ・ニ・ヲ]の場合で、この時二格名詞句の意味役割の解釈は[相手]に傾きやすくなる。そしてもうひとつは、二格名詞句がモノ性を持ち語順が[ガ・ヲ・ニ]の場合で、この時二格名詞句の意味役割は[着点]に傾きやすくなる。ただし、先にも述べたとおり、以上は結果的な解釈によって発生する読みであって、密着構文において二格の項に要求されるのはあくまで具象物性である。典型的な[相手]は、3.1.で述べたように、意図的・主体的な動作を行うことのできる、いわば「もうひとりの動作主」としての性格を持つものであるので、密着構文においてヒト名詞二格に対して解釈される[相手]の意味役割は、典型的なものよりも[相手]としての性格は弱い。またモノ名詞二格に対して解釈される[着点]の場合も、密着構文が「地点の変更」を表さず、場所性の確立が要求されるわけではないために、典型的なものよりも[着点]としての性格は弱い。

(70) 密着構文（「密着の様態」を表す構文）

a. 二項

動詞が要求する意味的特性：{具象物}ガ {具象物}ニ

名詞が補充する意味素性：{ヒト／モノ}ガ {ヒト／モノ}ニ

二格名詞句の意味役割：[密着物]

b. 三項

動詞が要求する意味的特性：{ヒト}ガ {具象物}ニ {モノ}ヲ

名詞が補充する意味素性：{ヒト}ガ {ヒト／モノ}ニ {モノ}ヲ

二格名詞句の意味役割：[密着物]

### 3.4. 存在構文

存在動詞の場合は、以下のように、二格の項に、ヒト名詞、モノ名詞、コト名詞、抽象モノ名詞のいずれも立つことができる。

(71) {ヒト}ニ {ヒト／モノ／抽象モノ}ガ

a. 太郎に（は）恋人がいる。

b. 太郎に（は）金がある。

c. 太郎に（は）才能がある。



- (72) {モノ}ニ {ヒト}ガ  
a. 学校に太郎がいる。
- (73) {モノ}ニ {モノ}ガ  
a. 戸棚におやつがある。  
b. 子供部屋にテレビがある。
- (74) {モノ}ニ {抽象モノ}ガ  
a. 本に傷がある。  
b. 茶碗にひび割れがある。
- (75) {コト}ニ {ヒト}ガ  
a. 会議に傍聴者がいる。  
b. 授業参観に父親がいる。
- (76) {コト}ニ {抽象モノ}ガ  
a. 会議に議題がある。  
b. 話し合いに無駄がある。
- (77) {抽象モノ}ニ {ヒト}ガ  
a. 生徒会に太郎がいる。
- (78) {抽象モノ}ニ {抽象モノ}ガ  
b. 能力に限界がある。  
a. プログラムにバグがある。

これらの二格名詞句が指す実体は、ガ格名詞句が指す実体の所在地点であるため、二格名詞句はガ格名詞句に対して場所性を満たす必要がある。ただし、これらの二格名詞句が指す実体は、ある実体の存在の表現のための前提となる地点であるために、名詞の意味素性には制限がない。この場合、名詞の意味素性で選択制限を受けるのはガ格名詞句のほうになる。

(71) のように二格名詞句がヒトの場合は、ガ格名詞句が具象物であっても、物理的な存在の意味にはならず、所有の意味になる。これは、「所在性」を満たすために具象物を抽象化することによって、結果的に存在の意味を所有の意味に転化していると言ってもよいだろう。通常の物理的なモノの存在をあらわす文が[ガ・ニ]の語順でもさほど問題がないのに対して、このような所有の意味を表す文の場合は、[ガ・ニ]の語順できわめて不自然になる。

(79) 本が本棚にある。

(80) a. ??恋人が太郎にいる。

b. ??才能が太郎にある。

これは、(71) のような所有の意味を表す文が、事象叙述文を離れて、主体の属性を表す属性叙述文になっているためであると考えられる。属性叙述文では、属性主は文頭に位置する必要がある、また「は」によって主題化されたほうが許容度が高いが、(80) はこれらのいずれにも反しているために許容度が低い。

(81) 存在構文

動詞が要求する意味的特性：{場所}ニ {具象物／抽象モノ}ガ

名詞が補充する意味素性： {ヒト／モノ／コト／抽象モノ}ニ

{ニ格名詞句の場所性を満足させられる意味素性}ガ

ニ格名詞句の意味役割： [存在点]

### 3.5. 発生構文

発生動詞の場合も、存在動詞の場合と同様、ニ格の項に、ヒト名詞、モノ名詞、コト名詞、抽象モノ名詞のいずれも立つことができる。

(82) {ヒト}ニ {抽象モノ}ガ

- a. 太郎に幻覚症状が現れた。
- b. 太郎に所有権が発生した。

(83) {モノ}ニ {ヒト}ガ

- a. 舞台に太郎が現れた。

(84) {モノ}ニ {モノ}ガ

- a. 水たまりにボウフラが発生した。

(85) {モノ}ニ {抽象モノ}ガ

- a. コップにひびが入った。
- b. 本に傷がついた。

(86) {コト}ニ {ヒト}ガ

- a. 結婚式に太郎が現れた。
- b. 試験に欠席者が出た。

(87) {コト}ニ {抽象モノ}ガ

- a. 話し合いに支障が生じた。

(88) {抽象モノ}ニ {抽象モノ}ガ

- a. 精神に異常が現れた。
- b. 友情に亀裂が生じた。

これらのニ格名詞句が指す実体は、発生変化の完了時にガ格名詞句が指す実体（発生物）の所在地点になるため、ニ格名詞句はガ格名詞句に対して場所性を満たす必要がある。ただし、これらのニ格名詞句が指す実体は、ある実体の発生の表現のための前提となる地点であるために、名詞の意味素性には制限がない。この場合、名詞の意味素性で選択制限を受けるのはガ格名詞句のほうになる。本稿では、これらのニ格名詞句に対して解釈される意味役割を「発生点」と呼ぶことにする。

発生構文は、存在構文的な性格と、位置変化構文的な性格を合わせ持っていると言える。存在構文的な性格としては、(ア)ニ格の項が事象記述の前提となる地点を表しており、意味素性の制限がないこと、(イ)「ニ・ガ」の語順をとりやすいこと、(ウ)アスペクティブに変化過程が読みにくいこと、が挙げられる。一方位置変化構文的な性格としては、(ア)何らかの変化を表す構文である

こと、(イ) 変化の完了時点において、ニ格名詞句がガ格名詞句に対して「所在性」を満たすようになること、が挙げられる<sup>17)</sup>。

(89) 発生構文

動詞が要求する意味的特性：{場所}ニ {具象物／抽象モノ}ガ

名詞が補充する意味素性： {ヒト／モノ／コト／抽象モノ}ニ

{ニ格名詞句の場所性を満足させられる意味素性}ガ

ニ格名詞句の意味役割： [発生点]

### 3.6. 対処態度構文

ここでは、できごと等の抽象的なものに対する関わり方の態度・様態を表す構文について見ていく。この構文はまず、アスペクト的な特性から、開始様態を表すものと遂行様態を表すものに区分され、さらに、遂行様態を表すものは、動作的なものと心理的態度を表すものとに区分される。また、心理的態度を表すものの中には、積極的な態度表明を表さずに、ある出来事の中に巻き込まれるというような意味を表すものもある。

#### 3.6.1. 開始様態

以下の例は、ある事象（ことがら）を開始する局面における主体の様態を表している。

(90) {ヒト}ガ {コト}ニ

- a. 太郎が悪事に手を染めた。
- b. 会社が事業に着手した。
- c. 太郎が仕事にとりかかった。

これらの場合、ニ格名詞句は開始される事象（ことがら）そのものを表しており、したがって、ニ格の名詞の意味素性は、コト性を持つものに制限される。この場合のニ格名詞句の意味役割は、和氣(1996)で「目標」と呼んだものに相当する。

#### 3.6.2. 遂行様態

##### 3.6.2.1. 動作的様態

以下の例は、ある事象（ことがら）を遂行する局面における主体の様態を表している。

(91) {ヒト}ガ {コト}ニ

- a. 太郎が勉学に励んだ。
- b. 太郎が研究に邁進した。
- c. 警察が人質の救出に全力を尽くした。
- d. 太郎が研究に専念した。
- e. 太郎が仕事に没頭した。

これらの場合も、ニ格名詞句は遂行される事象（ことがら）そのものを表しており、そのため、ニ格の名詞の意味素性がコト性を持つものに制限される。この場合のニ格名詞句の意味役割は、和

氣(1996)で「範囲」と呼んだものに相当する。

### 3.6.2.2. 心理態度表出

以下の例は、積極的な心理的態度の表出を表しており、二格名詞句は心理的態度の向けられるコトや抽象モノ、ヒトを表している。

(92) {ヒト}ガ {コト／抽象モノ／ヒト}ニ

- a. 住民が ビルの建設に／仲介案に／市長に 反対した／抵抗した。
- b. 住民が 役所の指導に／条例に／市長に 従った。
- c. 太郎が 娘の結婚に／提案に／花子に 賛同した。

これらの例で二格の名詞の意味素性が基本的に抽象物に限られるのは、抽象物に対しては抽象的な働きかけしかすることができず、物理的な働きかけが不可能であることの反映と考えられる。また、二格名詞句がヒトの場合、具象物としてのヒトそのものに対する物理的な働きかけではなく、ヒトの持つ意見やヒトの行為などに対して何らかの態度を表明するという意味を表す。その点で、ヒト名詞の場合も、抽象化されていると考えることができる。

### 3.6.2.3. 巻き込まれる心理・身体変化

以下の例は、積極的ではないものの何らかの心理的な変化を表しており、二格名詞句は心理的態度の向けられるコトや抽象モノ、ヒトを表している。その点でこれらの例は、3.6.2.2.で述べた心理態度表出の下位類型に属するといえる。

(93) {ヒト}ガ {コト／抽象モノ／ヒト}ニ

- a. 太郎が恋に悩んだ。
- b. 次郎が巨匠の絵に感動した。
- c. 赤ん坊が父親におびえた。
- d. 花子が太郎の態度に失望した。

これらの例の二格名詞句の意味役割は、和氣(1996)で「起因」と呼んだものに相当する。和氣(1996)では、[目標][範囲][起因]は、コト性を軸に連続体をなすものとしてとらえた。しかし、本稿ではこれを修正し、コト性意味役割の連続体の中から「起因」をはずすことにする。

「起因」と解釈される意味役割を持つ二格の名詞は、それ自体としてはコトやモノ、ヒトといったさまざまな意味素性を持っている。これが文中におかれたとき「起因」としての読みを与えられるのは、語用論的に、ガ格名詞句に何らかの形で働きかけて事象のなかに巻き込むものとしての解釈が発生するからである。この「事象への巻き込み」の意味は、名詞の意味素性や動詞の意味といった条件のいずれかひとつのみに依存するものではない。文脈中の複合的な条件によって、結果的に、ガ格名詞句で示される実体が事象の中に巻き込まれるという意味が解釈しやすいほど、当該の二格名詞句が「起因」の解釈を持ちやすい、ということである。

また、以下の例が表す事象は心理的な変化ではないが、二格名詞句の意味役割は結果的にはやはり「起因」として解釈されうる。

(94) {ヒト}が {モノ}ニ

- a. 子供が漆にかぶれた。
- b. 太郎が生ガキにあたった。
- c. 花子が水に濡れた。

これらの例が表すのは基本的にはモノの接触による主体の様態の変化であり、構文としては密着構文に近いと考えられる。このことから、[起因]の解釈は対処態度構文以外でも発生する可能性があると言える。

#### 4. さいごに

格助詞「に」は、それ自体では単一の意味役割を表示しない。その点で、二格はカラ格などの典型的な意味格とは性質が異なっており、二格を完全な意味格として扱うことは適当ではない。しかし一方、二格名詞句は、ガ格名詞句やヲ格名詞句など他の構造格成分との相対的関連において、名詞の意味素性の選択に一定の制限を受ける。本稿で見た、場所性や相手性などは、まさにそのような意味的な選択制限を規定するものとして働いている。このような点では、二格は、完全な構造格とも異なる。それでは、二格は、どのような性格を持ち、どのように機能していると言えるのか。

本稿では、二格名詞句は、構造格成分を取り巻くかたちで構文タイプを拡張的に規定する成分として機能していると考ええる。二格名詞句は、典型的な構造格成分のように動詞と組んで構文の骨格を作るのではなく、構造格成分と関係して副次的な構造を作ることで、構文の型を拡張する。すなわち、二格は、ガ格とヲ格だけでは作ることのできないさまざまな構文のバリエーションを作るのに大きな役割を果たしている。このとき、構造格成分と関係するためには一定の意味素性の制限が必要となり、一方、構造格を補助するかたちで構文の型を支えるには何らかの構造的な性格が必要となる。意味素性の制限については本稿で述べてきた通りであるし、和氣(1996)で指摘した二重二格制限、すなわち二格名詞句は動詞句内にひとつしか生起できないという制限は、まさに二格名詞句の構造的な性格を反映しているものと考えることができる。結局、二格は、「意味」と「構造」ということばで格をとらえるなら、その両面に關わる格であるということになる。ただしここで言う「意味」とは、定義どおりの「意味役割」のような動詞と名詞との類的な関係とは異なるレベルの問題であるし（この点についてはすぐ後で触れる）、「構造」的な性格についても、動詞ではなく他の名詞句に対して何らかの構造を構成すると考えられる点で、典型的な構造格成分の持つ構構性とは異なるものである。ここでは、このような性格を持つ二格を、仮に「構造補助格」という名で呼ぶことにしたい。以上のことから、ある格に対して構造格か意味格かという二者択一を迫るような分類は、分類基準としては厳しすぎるということになる。

本稿では、半ば便宜的に「意味役割」という用語を用いてきた。意味役割は、動詞と名詞との意味的關係の類型として定義されている。しかし、本稿で述べてきた場所性や相手性は名詞と名詞との間に現れる意味的性質であり、それによって結果的に解釈される[着点]や[相手]といった類型的意味も、動詞が表す事象の中でのメンバーという前提はあるものの、結果的には名詞と

名詞との関係によって生まれるものである。したがって、本稿のような考え方を進めていけば、二格名詞句に限っては、「意味役割」という概念が不要になる可能性も出てくる。

最後に今後の課題であるが、上で「副次的な構造」と述べたものが、統語的にはどのような構造であるのかという点について、統語論的なテストをふまえた上で明らかにする必要がある。構造格成分と二格名詞句との関係は、動詞一項の関係とはどう異なるのか、さらには、名詞―結果副詞のような二次叙述の関係とどう異なるのかという点については、本稿では触れることができなかった。いずれも統語論的な立場からの検証が必要な問題である。ただ現時点でひとつだけ言えることは、構造格成分と二格名詞句との関係は、あくまで実体対実体の関係であり、二次叙述の場合の、実体とそれについての（形容詞的な）叙述という関係とは異なるという点である。この点を含めて、構造格成分と二格名詞句の意味的な相関関係を考慮に入れた統語論的考察は、今後の課題としたい。

#### 注

- 1 益岡(1987)。フィルモア(1975)「深層格」、仁田(1980)「格」、村木(1991)「叙述素」等の類似の概念を含む。
- 2 後述のとおり、〈目的〉は厳密には名詞句の意味役割とは言えない。表記法を変えているのはこのためである。しかし、いくつかの先行研究がこれを〔相手〕や〔場所〕等と同列に扱っているので、念のためここに加えてある。
- 3 存在の場所を表す意味役割を、本稿では、〔存在点〕と呼ぶことにする。
- 4 話者によっては(12)の許容度が低いと感じるかもしれない。この文型の許容度は、動詞の状態性の高さ、属性主体が「は」によって主題化されているかどうか、文末が否定形かどうか、などの要因によって左右されるが、これらの要因はいずれも、ある文が属性叙述文として読みやすいためにはどういう条件が必要かということの一点に集約される。そして、属性叙述文として読みやすいほど、このような見かけの二重二格も許容されやすくなると考えられる。このような文型の成立基準については、別稿で考察する。
- 5 ここでの意味役割の解釈のゆれには、語順の問題も関与している。〔ガ・ヲ・ニ〕の語順では二格名詞句の意味役割が〔着点〕の解釈を受けやすいのに対して、〔ガ・ニ・ヲ〕の語順では二格名詞句の意味役割が〔相手〕の解釈を受けやすい。語順による意味役割の解釈のゆれの問題については、後でも触れる。
- 6 ヒト以外の有情物については、本稿ではこれ以降特に触れない。ヒト以外の有情物は、自律的な動作は可能だが目的意識に基づいた意図的な動作は期待しにくいなど、問題も多いが、これについては今後の課題とする。
- 7 あるできごとがデ格で示される場所の内部に存在するということからすれば、ということである。ただし、これが厳密な意味で「所在性」に由来する性質かどうかについては、判断を保留する。
- 8 ここで表されるのは「所有」の意味であり、物理的な実体の存在の意味では不可である。その点で、この場合のガ格名詞句の意味素性は抽象モノとすべきかもしれない。「所有」については後でも触れる。
- 9 これも上の注同様「所有」の意味を表し、物理的な実体の存在の意味では不可である。

10 たとえば、「修正」という名詞は、「スル」がつくことから基本的にはコト名詞であると考えられるが、以下の例のように、ガ格名詞句として抽象モノニ格との間に所在性を構成するように見える場合がある。

i) 議案に修正がある。

しかし、上の例の「修正」は、以下に示すとおり、できごととしての回数を数えることはできず、抽象的なモノとしての個数しか数えることができない。

ii) \*議案に修正が数回ある。

iii) 議案に修正が数カ所ある。

このことから、i) の「修正」は、「修正点」のような、抽象モノとして扱われていると考えられる。この場合のコトの抽象モノ化のような、(20)における横方向への素性の読み替えには、何らかの語用論的な条件が関わると考えられる。(20)は意味論的な素性の階層をあらわしたものであり、語用論的な素性の読み替えについては対応できない。本稿では、語用論的な素性の読み替えについては、ヒトの抽象モノ化など、最小限のものについてしか触れていない。詳しい点については、今後の課題とする。

11 「Nのところ」は、名詞Nが指す実体が空間内に存在する地点を示す。この点で、そのままでは場所性を満たせない名詞に「のところ」を付加するという言語的行為は、ここに述べてきた実体から位置への語用論的な読み替えと同値であり、「地点性」の確立・保証ということにはほかならない。また、「Nのところ」が指し示す位置は、当該の名詞Nが指す実体が空間中に占める範囲と完全に一致しない場合もあるが、このことは山梨(1993)のいうメトニミーリンクの問題であって、ここで述べた「地点性」の問題とは性質の異なる問題である。

12 「胃」「腸」などの身体名称も場所として振る舞うということがしばしば指摘される (cf.田窪(1984))。

i) 胃に痛みがある。

田窪(1984)は「部分化」という概念を提出して身体名称の場所扱いを特殊な場所表現のひとつとして述べているが、本稿の「地点性」の概念からすれば、このような身体名称の場所扱いは至極当然であると言える。すなわち、体全体についての叙述ということが暗黙の了解としてあり、その上で体の中の特定の部分が相対的に特定されるために「地点性」が確立でき、場所性を満たす可能性が出てくるということである。存在主体が上例に見る「痛み」のような抽象モノであれば「所在性」も満たされ、存在構文として許容されることになる。

13 場所性に関する概念として、「方向性」についてひとこと触れておきたい。本稿では、ニ格名詞句の「場所性」という概念を「地点性」と「所在性」との複合概念として扱うのと同様に、ニ格名詞句の「方向性」という概念を、「境域性」と「所在性」との複合概念として考えておく。「境域性」とは、「認知空間内のある範囲を、特定の区域として指定できる」という性質である。「方向性」を作りやすい名詞として、以下のようないわゆる相対名詞が挙げられる。

i) ほう、そば、右、上、南

相対名詞そのものが意味するのは抽象的な関係概念であり、それらが単独で方向の意味を持つわけではない。相対名詞は、「Nの」が上接しない場合は現在話題になっている地点との相対位置、上接する場合はNとの相対位置を指定することによって「境域性」を確立する。このとき、場所を示す名詞句自体に「ある実体との相対的な位置の指定」という特性が入ることによって、場所を示す名詞句自体に空間的な幅の広がりが発生し、結果として「方向」の意味が発生する（この際注意すべきなのは、この「方向」がガ格／ヲ格の実体からの方向ではなく、Nからの方向であるという点である）。そのままでは方向性を満たせない名詞に「のほう」を付加するという言語的行為は、実

体を空間内の区域に読み替えることで「境域性」を保証するということと同値である。これは、そのままでは場所性を満たせない名詞に「のところ」を付加することで「地点性」を保証するということと並行的であると言えるだろう。

また、へ格それ自体が表すとされる「方向」の意味についても、なお詳しい分析が必要である。北原(1997)は、方向の意味役割を持つ二格名詞句は限界点を示さず、位置変化量を示す数量詞と共起できると述べた。

ii) 恭子が鳥帽子岩の方に500m泳いだ。(北原(1997): 50)

もしへ格が、上例の二格名詞句の意味役割とまったく同じ「方向」の意味をあらわすとすれば、次の文は許容されるはずであるが、実際には非文になってしまう。

iii) \*太郎が学校へ1km行った。

一方、「のほう」を付加した場合、二格／へ格に関わらず許容される。

iv) 太郎が学校のほうに／へ1km行った。

したがって、「へ」が「方向」をあらわす、という単純な記述では不十分であることになる。この注の前半部分で触れた「方向」の概念が、場所を示す名詞句そのもののなかの何らかの空間的な広がりをもたらすものであるのに対して、へ格が問題とするのは、移動主体を基準とした空間的な幅である。このことは、相対名詞が存在構文や発生構文にも生起可能なのに対して、へ格名詞句が存在構文や発生構文には生起不可能なことから知ることができる。以上のふたつの異なる意味あいでの「方向」の概念について、今後詳しく整理・分析する必要がある。また、特に後者の意味合いでの「方向」については、アスペクト的な過程性との関連についても、なお考察すべき点がある。いずれも今後の課題としたい。

- 14 「太郎が椅子から床に倒れた」のカラ格は主体の元の状態を表しており、位置を表すものではないと考える。
- 15 「太郎が廊下に立った」とした場合、「廊下に太郎がいる」は問題なく容認される。この点で、この文が表す事象は典型的な位置変化により近いと言える。
- 16 姿勢変化構文でヒト名詞ヲ格がとりにくい理由についてはここでは触れない。本稿のような意味素性による分析方法がヲ格名詞句に対しても有効であるかどうかについては、今後の課題とする。
- 17 発生構文に関連して、生産構文の場合、例えば「作る」のように、場所を表す二格名詞句が必ずしも必須とは言えない動詞もあって、生産動詞が発生動詞の他動詞タイプであるとは単純に言えないため、ここでの議論はさけることにする。

#### 参考文献

- 井島 正博 (1986) 「格文法の再構成」『防衛大学校紀要』人文科学分冊 第五十二輯
- 奥田 靖雄 (1983) 「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 影山 太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版
- 北原 博雄 (1997) 「位置変化動詞」と共起する場所二格句の意味役割——着点と方向の二分——『国語学研究』36 東北大学文学部「国語学研究」刊行会
- 北原 博雄 (1998) 「移動動詞と共起する二格句とマデ格句——数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察——」『国語学』195
- 清水 康行 (1987) 「格の表現」山口明穂編『国文法講座 6 時代と文法——現代語』明治書院



- 城田 俊 (1993) 「文法格と副詞格」 仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 杉本 武 (1991) 「二格を取る自動詞——準他動詞と受動詞——」 仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 田窪 行則 (1984) 「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12 大阪外国語大学
- 竹沢 幸一 (1995) 「「に」の二面性」『言語』Vol.24 No.11 大修館書店
- 竹沢 幸一 (1999) 「空間表現の統語論——「叙述」の観点から——」平成7年度～10年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書『空間表現の文法化に関する総合的研究』筑波大学
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田 義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院
- 仁田 義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」 仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- チャールズ・フィルモア (1975) 『格文法の原理』(田中春美・船城道雄訳) 三省堂
- 益岡 隆志 (1987) 『命題の文法——日本語文法序説——』くろしお出版
- 村木 新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 森山 卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 矢澤 真人 (1994) 「「格」と階層」 森野宗明教授退官記念論集編集委員会『言語・文学・国語教育』三省堂
- 矢澤 真人 (1997) 「発生構文と位置変化構文」『筑波日本語研究』2 筑波大学文芸・言語研究科 日本語学研究室
- 山梨 正明 (1987) 「深層格の核と周辺——日本語の格助詞からの一考察」『言語学の視界』大学書林
- 山梨 正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル——格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」 仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 和氣 愛仁 (1996) 「「に」の機能」『筑波日本語研究』創刊号 筑波大学文芸・言語研究科 日本語学研究室
- 和氣 愛仁 (1997) 「文法的ヴォイスと二格名詞句」『筑波日本語研究』2 筑波大学文芸・言語研究科 日本語学研究室

(投稿受理日：1999年9月9日)

---

和氣 愛仁 (わき としひと)

筑波大学大学院 文芸・言語研究科院生  
 305-0003 つくば市桜3-8-4 アグレアール204  
 wakit@lingua.tsukuba.ac.jp

## The structural principle behind the interpretation of 'NP-*ni*' in Japanese

WAKI Toshihito

Graduate student, University of Tsukuba

### Keywords

NP-*ni*, thematic roles, construction types, structural Case, inherent Case

### Abstract

It has been observed that NP-*ni*'s can bear many types of thematic roles and that the interpretation of individual NP-*ni*'s is sometimes ambiguous. The purpose of this paper is to examine the principle behind the interpretation of NP-*ni* phrases in Japanese.

In Japanese, it is not possible for two NP-*ni*'s to co-occur in a VP, even if they have different thematic roles. Therefore, I argue that NP-*ni*'s do not function as semantic constituents, in the strict sense of the term. That is, since the individual NP-*ni*'s work on the same functional level as structural constituents, they cannot co-occur in a VP. This paper argues that the interpretation of the thematic roles of NP-*ni*'s (COMPANION, PLACE, GOAL, etc.) depends on the relationships between the semantic features of the NP-*ga*/NP-*o* and those of the NP-*ni*, the aspect of the verb, pragmatic conditions, and so on.

The Case marker '*ni*' does not bear any specific thematic role. In this respect, the Case marker '*ni*' is different from other typical inherent Case markers, such as '*kara*'. However, on the other hand, NP-*ni*'s are subject to certain restrictions on their semantic features in relation to NP-*ga*/NP-*o*. 'Locativity' ('*Basho-sei*') and/or 'Companion-ivity' ('*Aite-sei*') function to characterize such semantic restrictions. In this respect, the Case marker '*ni*' also differs from typical structural Case markers.

I argue that NP-*ni*'s form secondary structures (in sentences) with NP-*ga*/NP-*o*, while maintaining the semantic relationships; that is, NP-*ni*'s extend the variety of sentence construction types that cannot be formed merely with NP-*ga*/NP-*o*. Restriction of the semantic features of the NP-*ni* is necessary when the NP-*ni* forms secondary structures with NP-*ga*/NP-*o*; moreover, it is necessary for the NP-*ni* to have a structural characteristic in order to form a sentence construction by supplementing other Case-marked NPs. In conclusion, I claim that NP-*ni*'s participate in both the structural and semantic domains of sentence constructions.